

半國は、成春が失政に據つて野、市の館に居る能はざるに至つたので、その遺跡を賜はつたものである。政則乃ち翌三年五月六日將軍に謁し、十月加賀に入部したが、富樫氏の被官岩室某は、成春の嫡子政親を奉じて之を妨げた。爾後の経過は甚だ不明であるが、應仁元年京師の騒亂に、赤松氏の家人にして、加賀國の守護代であつた間島河内が、西軍の爲に大石を投ぜられて死んだとあるから、當時尙赤松氏が加賀半國の守護と稱してゐたことがわかる。同二年五月六日にも北加賀に於いて政則の臣小寺某が、富樫氏の部將額某と戦ひ之を破つたとの記録もある。赤松氏が何れの年にこの守護職を棄てたかは詳かでないが、文明に入つて政則は舊封藩體・備前・美作三州を得、之に反して加賀は政親の撥頭によつて統治する能はざるに至つたのであらう。

その後明應二年四月、細川政元の足利義澄を擁立した時、政則は之に屬して大に奔走した。是を以て五月、政元が政則の舊領加賀半國を安堵せしめんことを約し、廿七日政則は物を義澄及び政元に獻じて恩を謝した。しかし政則は單にこの辭令を得たに止つて、實際には一指をも染め得なかつたらしい。五年四月廿五日歿、享年四十二。

アカマツレンジヨウ 赤松遠城 眞宗西派の僧。天保十二年金澤大工町越中屋佐助の次男に生まれ、西勝寺慶應の弟子となり、明治元年周防郡福田村德應寺に入り、赤松氏を襲いだ。號は福泉・榕陰・圓通道人。五年歐洲に巡遊し、後勸學に任せられ、佛敎大學總理を経て番宿となり、大正八年七月二十日七十九歳を以て自坊に寂した。法諡圓通院。

アカラジマ 明島 石川郡林郷に屬する部落。この村は、もと春木・山庄・西村・灯燈・中村に分かれて民家があつたから、明島五領ともいうた。その中灯燈は後に廢絶した。
アガリエ 上江 能美郡粟津郷に屬する部落。
アガリチ 上里知 從來給人が知行として受けてゐた地で、現に収公せられ藩の直轄になつてゐるものをいふ。
アカキ 赤井 能美郡板津郷に屬する部落。
アカキゴンザエモン 赤井權左衛門 古市五左衛門の弟で、赤井治右衛門の養子となつたもの。寛永十六年前田利常に仕へて三百石を領し、子孫相繼いで藩に仕へた。
アカキトクスイ 赤井得水 金澤の人。諱は明啓、通稱文次郎。初め書法を井出正水に學び、後佐々木志頭磨に親炙してその風を能くした。著す所に筆法蒙引・時行文案・俳諧閣梅がある。
アカキナホヨシ 赤井直喜 通稱喜八郎。傳右衛門。初諱直定。文政五年祖父平左衛門の後を承け、幼にして祿三の一を襲ぎ、御馬廻に班し、七年本祿三百石となり、大小將・御住居御用達等に任じ、元治元年武田耕雲齋西上の際、加賀藩の部將として出陣功があつた。葉原記の著がある。明治廿一年直喜七十九歳で尙存命し、三駱の名を以て文化八年以降明治四年に至る傳聞と實歴を記し、題して見聞袋群斗記といつた。
アカユカキ 赤繪書 藩末から九谷燒の上繪附をする者を赤繪かきといふた。陶工勇次郎が専ら赤釉の繪附をした後の稱である。

アカエウジロウ 赤繪勇次郎 陶工。精細なる赤繪を着飾するを以て、世人赤繪勇次郎と呼んだ。舊説に、勇次郎は肥前の人で本姓三田氏と傳へたが、阿波徳島で生まれ、武田氏で、伊萬里に學んだ人といはれる。文化十四年能美郡若杉郷に來つて製作に従ひ、天保十四年頃越中井波の富商牧屋で色繪若杉の類を作つた。
アカヲサンダユウ 赤尾三太夫 祿八百石。御馬廻に班した。大坂詰人中御藏米引賣に付き、享保八年九月廿七日召返され、篠原將監に御預となり、藩侯前田吉徳が代替り初であつた爲死一等を減じ、九年六月十八日能登島に流刑となつた。
アカヲジヨウ 赤尾城 江沼郡瀨の地内に在つた。越登賀三州志に、赤尾は一に赤岩にも作り、山上に方五間許の平地があると記する。一揆の將藤丸新介がこゝに居り、弘治元年七月朝倉宗滴に攻められて之を棄て、同郡横北に退いたことがある。

アカヲトノモ 赤尾至殿 初め土屋但馬守に從うたが、慶安二年前田利常に來仕して二千石を領し、御先簡頭となつた。延寶五年致仕して少水と號し、天和三年歿。その嫡統は、第四代三太夫が享保九年能登島に流刑となるに至つて廢絶した。
アカヲホンペイ 赤尾本平 本平は藩士小川直右衛門の足輕赤尾丹右衛門の次子であつた。初め丹右衛門は主家の長屋に寓して、己の家を興力堀豐右衛門に貸した。然るに豐右衛門はその賃を拂はなかつたから、明和五年丹右衛門は之を訪うて詰責し、却つて豐右衛門とその子長太夫の爲に殺された。本平長じて又足輕となり、父の仇を報いようと思つてゐる中に豐右衛門が死んだから、安永七年九月十五日早臈長太夫をその家に襲うて殺し、直に脱走した。本平時に年二十五。本平の兄宗之助は、飯田氏に養はれ、歩士となつてゐたが、本平と事を共にし得なかつたを恥ぢ、明且金澤城大手附近で自殺した。この事件に關する三州良民言行録の記事は、年紀その他に誤謬がある。

アキイレ 秋納 稻の刈上の終了を祝するを刈上仕舞・刈上休・カリンテともいひ、農家では酒を汲み萩餅を食した。之に次いで干場固又は干場祭があつて、稻を稻架から收め得たことを祝し、又稻扱の終つた時をコキンテ又はコキンテヨウといひ、初摺の終つた時をボタカリといひ、衣装の終る時を秋上りとも庭仕舞ともいふた。
アキグミヨリキ 明組與力 ↓ヨリキ 與力。
アキケンチ 秋檢地 ↓ケンチ 檢地。
アキゴゼン 安藝御前 加賀藩主第五代前田綱紀の女節姫は、廣島侯淺野吉長に嫁して安藝御前と稱せられた。又櫻田御前ともいはれる。
アキシ 阿岸 鳳至郡阿岸郷の古邑名。本誓寺所藏永祿元年七月の文書及び寶泉寺所藏天正七年七月の判書に阿岸村と見えるが、後世は南村となつてゐる。
アキシウチ 阿岸氏 長谷部系圖に、「信連五男五郎某、櫛比庄阿岸之地頭」とあつて、長家庶流五家の一つである。阿岸氏の子孫は信連記に、長氏の家士浦野孫右衛門事件に付、孫右衛門男浦野兵庫・弟阿岸掃部・せがれ一

アカエウジロウ 赤繪勇次郎 陶工。精細なる赤繪を着飾するを以て、世人赤繪勇次郎と呼んだ。舊説に、勇次郎は肥前の人で本姓三田氏と傳へたが、阿波徳島で生まれ、武田氏で、伊萬里に學んだ人といはれる。文化十四年能美郡若杉郷に來つて製作に従ひ、天保十四年頃越中井波の富商牧屋で色繪若杉の類を作つた。
アカヲサンダユウ 赤尾三太夫 祿八百石。御馬廻に班した。大坂詰人中御藏米引賣に付き、享保八年九月廿七日召返され、篠原將監に御預となり、藩侯前田吉徳が代替り初であつた爲死一等を減じ、九年六月十八日能登島に流刑となつた。
アカヲジヨウ 赤尾城 江沼郡瀨の地内に在つた。越登賀三州志に、赤尾は一に赤岩にも作り、山上に方五間許の平地があると記する。一揆の將藤丸新介がこゝに居り、弘治元年七月朝倉宗滴に攻められて之を棄て、同郡横北に退いたことがある。
アカヲトノモ 赤尾至殿 初め土屋但馬守に從うたが、慶安二年前田利常に來仕して二千石を領し、御先簡頭となつた。延寶五年致仕して少水と號し、天和三年歿。その嫡統は、第四代三太夫が享保九年能登島に流刑となるに至つて廢絶した。
アカヲホンペイ 赤尾本平 本平は藩士小川直右衛門の足輕赤尾丹右衛門の次子であつた。初め丹右衛門は主家の長屋に寓して、己の家を興力堀豐右衛門に貸した。然るに豐右衛門はその賃を拂はなかつたから、明和五年丹右衛門は之を訪うて詰責し、却つて豐右衛門とその子長太夫の爲に殺された。本平長じて又足輕となり、父の仇を報いようと思つてゐる中に豐右衛門が死んだから、安永七年九月十五日早臈長太夫をその家に襲うて殺し、直に脱走した。本平時に年二十五。本平の兄宗之助は、飯田氏に養はれ、歩士となつてゐたが、本平と事を共にし得なかつたを恥ぢ、明且金澤城大手附近で自殺した。この事件に關する三州良民言行録の記事は、年紀その他に誤謬がある。
アキイレ 秋納 稻の刈上の終了を祝するを刈上仕舞・刈上休・カリンテともいひ、農家では酒を汲み萩餅を食した。之に次いで干場固又は干場祭があつて、稻を稻架から收め得たことを祝し、又稻扱の終つた時をコキンテ又はコキンテヨウといひ、初摺の終つた時をボタカリといひ、衣装の終る時を秋上りとも庭仕舞ともいふた。
アキグミヨリキ 明組與力 ↓ヨリキ 與力。
アキケンチ 秋檢地 ↓ケンチ 檢地。
アキゴゼン 安藝御前 加賀藩主第五代前田綱紀の女節姫は、廣島侯淺野吉長に嫁して安藝御前と稱せられた。又櫻田御前ともいはれる。
アキシ 阿岸 鳳至郡阿岸郷の古邑名。本誓寺所藏永祿元年七月の文書及び寶泉寺所藏天正七年七月の判書に阿岸村と見えるが、後世は南村となつてゐる。
アキシウチ 阿岸氏 長谷部系圖に、「信連五男五郎某、櫛比庄阿岸之地頭」とあつて、長家庶流五家の一つである。阿岸氏の子孫は信連記に、長氏の家士浦野孫右衛門事件に付、孫右衛門男浦野兵庫・弟阿岸掃部・せがれ一